



The letter of
Shinseisakuza

kunlapopolo・・・人々の中で人々と共に・・・



新制作座だより

vol.19

2019 AUTUMN

<http://www.shinseisakuza.com>

夏休み特別公演のご報告

— 2019年8月17・18・19日

国立オリンピック記念青少年総合センター—

この度は、全国各地から猛暑の中お越しいただき、誠にありがとうございました。

演劇『泥かぶら』に加え、DR（ドラマティックリーディング）と、眞山美保 作詩より「小さなコンサート」の同日開催という初めての企画は、緊張と集中の連続



円陣を組んで、幕を開けます



「泥かぶら」

泥かぶらの音色

でしたが、お客様に励まされ、深い友情に包まれた3日間5ステージを無事に終える事が出来ました。共催の「世界こども財団」をはじめ、ご協力を賜りました全ての皆さまに厚く御礼申し上げます。
2020年は劇団創立70周年。東京でまたお会いしたいと思います。

プ

フロログから大詰めまで、フルートで主人公の心の動きを表現した演劇『泥かぶら』は、昨年94歳の天寿を全うされた、作曲家・フルート奏者、川崎 優先生（まこと）20代の頃の演奏です。（作曲：石田

一郎・1936年日本初のハープ曲『牧歌』の作曲家)

10年前、私は川崎先生に初めてお目にかかりました。先生のお言葉、「まだ僕の演奏を使ってくれているの!?嬉しいなあ」是非聴いてみたい!」早速CDをお届けしたところ、ご自身の演奏に、若いなあ、と、付け加えつつ感慨深げな様子でした。先生のおおらかであたたかい眼差しが心に残りました。

昨年の音楽葬の席で、ご次男の川崎雅哉様にお会いした時、懐かしい思いに抱かれました。この度の夏休み特別公演の交流会で、幼い頃お父様に連れられ、新制作座サマーパーティーでBBQした日の思い出を語ってくださいました。

原爆の恐ろしさを体験された川崎先生のフルートの音と、敗戦



村の童

後の困難の中誕生した『泥かぶら』は、愛と平和の祈りのバトンを繋ぎ、これからも幕を開けてまいります。二度と悲劇を繰り返さぬようにと。

(記・小津和知穂)

「ドラマティックリーディング」

多様な人物像を描き出す

ド

ラマティックリーディング

『八郎』『泥かぶら』の2本を、8月17・18日の両日、夏休み特別公演のプログラムで上演しました。

今回の『八郎』は、渡邊灯人、酒井悠登によるピアノ連弾の伴奏の中で眞山蘭里が熱演しました。力強くきめ細やかな音楽と八郎の純真で勇敢な言動との闘いのシーンは、実に迫力がありました。観客に勇気を与えていました。

『泥かぶら』は、上杉綾が妊娠・出産・育児によるブランクを超えて久し振りに演じました。以前に比べ、生命力の強さや思い遣りの深さが増し、多様な人物像を描き出しています。

(記・斉藤平)

「ドラマティックリーディング」

お客様の笑顔に、ひとつの答え

ド

ラマティックリーディングは数年間公演を重ねてきま

したが、一般公開は今回が初めてでした。

演劇『泥かぶら』をご存知の方には、その紹介、縮小版と感じさせず、ご存知無い方には、これがオリジナルかと思うほどに、新鮮な感動を届けた。

一人で演じる分、独りよがりになりがちな表現や作品世界の理解を、客観的にご指導いただき、本番直前まで整えていきました。

語りを担当する自分としては、意欲が湧き出すと共に、責任も大きく感じていましたが、本番の舞台にいざ踏み出すと、ふと肩の力が抜け、ただ物語に没頭し、夢中で物語っている自分を感じました。

終演後にお声かけいただき、握手を求めてくださる沢山の方々のお顔に、物語が届いたことを実感、安堵しました。

まだまだ正解の無い、無限の可能性を秘めたドラマティックリーディング。

今後も多くの方に、その深化を見守っていただきたいと思います。

(記・上杉綾)

「小さなコンサート」

「生きている」実感

青

々と茂る木々に囲まれた稽古場に響く歌声。本番前という焦りや不安をかき消すような、あの「思いを届けたい人」の声が聴こえた瞬間を、僕は一生忘れないだろう。

劇団新制作座の音楽担当として、公の本番を迎えるのは今回が初めてであった。演劇と歌の本番が続くという企画に、僕は正直、不安であった。緊張感や体力が保つかどうか、練習が疎かにならないかを抱えては稽古に向かう日々に、少しばかり焦燥していた。歌の稽古では、どうにかして「歌う」ことではなく、「思いを伝える」ことを目的にしてもらえよう練習する、試行錯誤の連続であった。そんなある日、急な提案で「歌に演技をつける」ことになった。僕は内心が気ではなかったが、演技しながら歌った際に、音程が



星槎グループ 宮澤保夫様より



ロビーにて、星槎国際高校の生徒たちと

良くなり、発声も良くなったことに驚いたとともに、伝えるべき言葉の正体に気づいた。演劇も音楽も、現場で作り上げる「空間芸術」であるという認識がされれば良いということだ。僕は混声の歌の練習の前に、これぞとばかりにそう告げた。まさに歯車が噛み合ったようなあの瞬間は、「生きていく」実感と名付けても良いような、湧き上がる感動そのもので

あった。

本番については言わずもがな出来栄であったため、ここに書き連ねるのは不粋であると判断する。しかし、芸術において「完璧」などというものはあり得ないため、今後の稽古では、より歌う意義が過不足なく伝わるような、細かい努力が積める、そんな練習を重ねていきたいと考えている。

最後に、僕のような青二才の言葉に耳を傾けてともに音楽を作り上げてくださった劇団の皆さんや、ともにピアノを演奏してくれた酒井くんに感謝申し上げます。

(記・渡邊灯人)

「小さなコンサート」 詩から感じる美保先生に出会えた

教 えてくださったのは渡邊灯人さん。東京音楽大学を今年卒業された素晴らしいピアニスト。

驚いたのは、灯人さんの音楽への向き合い方の真摯さと情熱と技。それが歌い手の一人一人に真直ぐに向ってくる。その教え方に感動し沢山の発見をした。



西原春夫様より

その一番の例は、幕開きの歌『振り分け髪の昔より』。美保先生が「唯一、自分のことを歌にした」と語られた曲。私はその言葉を理解していなかった。この歌の前では殊更に力み必死になった。声は硬くりズムは遅くなった。「客観的に歌わないと、この詩が逆の意味に伝わるかもしれない」と灯人さんが言った時、背筋が寒くなった。「逆に？」何ということ!! 私は瞬時に覚った。主観的とはこういうことなのだ。伴奏を聴き、共に歌っている人の声を聴き、柔らかな美保先生の笑顔を胸に歌った。むしろ美しい歌が懐かしい美しい歌になった。楽しかった。嬉しかった。私を知っているつもの美保先生ではなく、詩から感じられる美保先生に出会えた。灯人さん、ありがとうございました。

(記・江崎はんな)

— 観客の声

演劇『泥かぶら』

● ここには演劇を目指すものの原点みたいなものが確かにあった。だから観客たちにも「その演劇を盗みに来たような熱心さ」があったのかも知れない。

数十年ぶりの「泥かぶら」を観ながら、的確とは思わないが、あの芭蕉が元禄2(1689)年冬頃から説き始めたという「不易流行」という言葉を思い出させてくれた。

● 人間が人間に影響を受け、心を開き、素直になり、良い方向に変わっていくことが感動しますね。一生僕の心の中に生き続けるでしょう。

● シンプルなテーマながら時代をこえる大きな命題だと思った。

● この今の気持ちとずっと忘れずに、日々を笑顔で過ごしたいです。

● 子どももそうですが私たち子どもをもつ親が見るべきものでした。

● 心がきれいになるような感動

でした。やさしき喜び人として大切なこと、また確認させていただきました。

●大変感動しました。働けること、幸せです。明日から仕事がんばります！

ドラマティックリーディングと「小さなコンサート」

●ドラマティックリーディングは、とても迫力があり映像があっても語り手に集中でき、話の邪魔にならず、より想像力を増す感じがしました。

●演劇とは違う新しい感動を受けました。

●純粋な気持ちで、強くてやさしいエネルギーとして伝わってきました。

●一人一人の個性が際立った合唱は初めてです。他の詩も聞きたーいと思いました。

●コンサート、家庭的でよかったです。初めてみた演出に驚きました。

●平和へのヒントが示されたように感じ、心豊かな2時間でした。

「イベント」

星槎国際八王子・立川 新入生歓迎公演

―2019年4月18日―



「風に聞け」の舞台より



新入生歓迎公演

「星槎国際八王子」

「幻の名作」に挑む 演劇ゼミ

『たけくらべ』は樋口一葉の代表作。明治文学の最高傑作と評されている。これを脚色した真山青果も大正、昭和の劇界に君臨した大劇作家。天才2人

合わせたの名舞台を人々は待望したが、一葉、青果の精緻な青春描写を的確に表現出来る少年少女の役者が揃わず、今日まで殆ど上演が実現していない。そのため戯曲『たけくらべ』は幻の名作となった。

そこに恐れを知らぬ星槎国際八王子の演劇ゼミが目をつけ、挑戦を試みる。しかも90分という上演時間枠の中で・・・大人の登場するシーンを極力減らして間隙を一葉の名文でナレーションする。

前期の授業では、生徒に一葉の原作を全文朗読してもらった。彼らにとって明治文学は既に古語の世界、四苦八苦しながらどうにか最後まで読み切った。

後期は愈々台本に取り組む。来年2月の上演を目指しているが、間に合わなければ行き着いた所



演劇ゼミの様子 指導にあたる込山虔二郎

までの発表で無理はしない。美しい日本語と明治という時代を肌で感じてくれれば充分と思う。
何卒彼らの奮闘に暖かなご声援を・・・
(記:込山虔二郎)

「泥かぶら」

新潟県五泉市公演

―2019年5月9日―



五泉市「泥かぶら」の公演を終えて

「泥かぶら」

星槎名古屋中学校

— 2019年6月10日 —



三郎兵衛役で母校の舞台に立った田中大、恩師の安部先生（右）、三村先生（左）と

「イベント」

奈良の休日

— 2019年

5月12・14日 —

「新」制作座30年の歩み」の写真集のページを開く。

若草山に腰かけて、1000人を超す劇団員たちが眞山美保を囲み歌っている。まだ幼かった劇団員の子どもたちも一緒だ。

あれから半世紀。

先輩たちの年齢を考えると、動けるうちに皆で奈良へ！という



昭和55年 写真集より「奈良の休日（若草山にて）」



奈良公園の飛火野園地にて

ことになった。勿論反対意見はない。先輩たちの我が心の奈良は、美保先生と一緒に過ごした旅、胸に焼き付く日々なのだ、私が入団した時にはもう「奈良の休日」はなくなっていた。

思い出の地を訪れた先輩たちの話を、私は奈良で聞きたかった、そして、この旅を通してそれぞれの胸に残る、大切な忘れがたい記憶を切り取って見せてくれた。夕暮れ迫る二月堂の欄干に頬杖をつき語る眞山美保の芸術の原点。私は時空を超えて今そこに立っていた。

21世紀の奈良は、世界中のしかも家族連れの観光客で賑わっていた。夕暮れの二月堂は驚くほど静かだった。肌の色も目の色も言葉も違う人々が、茜色に燃える夕日が大空を染め沈む姿を、静寂の中で厳粛な感動をもって見つめていた。

時の重みに耐え美しさを放つ、造形の美、人間が慈しみ守り抜いた自然。

今度は私たちが若い世代と奈良へ行こうと思う。

新緑の5月に！。

（記・小津和知穂）

想いで奈良

爽

やかな五月晴れの日、数十年ぶりに訪れた奈良の法隆寺。雲一つない天に向かって立つ五重の塔を見た瞬間、眞山先生、劇団員と一緒に歩いたあの懐かしい日々を想い出しました。

入団した当時、新制作座では毎年奈良の休日があり、若葉の萌える頃劇団員全員公演地から奈良の地に集まり、悠久の歴史、日本文化の素晴らしさ、芸術家として如何に生きるべきか等々、眞山先生を中心に未来に向けての勉強会がありました。その後、飛火野で歌ったり語り合ったり。仏像の見方まで教えていただいた事を思い出します。中でも夕暮れ迫る二月堂の回廊で沈み逝く夕陽を



二月堂にて

観ながら皆で歌ったあの時の感動、情景は今でも鮮明に脳裏に有ります。

時が経ち何十年か振りにお会いした仏様、中でも秋篠寺伎芸天は思い出深い仏様です。柔らかな微笑み、語り掛けるがごとく佇むその姿の美しい事。その時買い求めたお守りは今でも肌身離さず持っています。

青年のころに出会い時を経てお会いした仏様は変わらず優しく迎えてくださいました。

又、すぐにでも奈良の地に行きたい!! 今回出逢え無かった仏様に逢いたい!! そう思う今回の旅でした。
(記・山形久人)

古都へ

京都から3時間で奈良に到着!

古都を築いた人々から見れば、新幹線は瞬間移動できる『どこでもドア』のようなものであろう。



五重の塔

なる。

今回の旅は新制作座の伝統行事「奈良の休日」。つつじが美しい5月に、11名の先輩方とご一緒させてもらい、かつて美保先生と訪れた劇団にとつて特別な地をめぐる。

奈良公園の青い芝で鹿と遊び、二月堂で黄昏れ、鑑真大和上の御廟の横で合唱し、旅先のいたるところを表現の場として取り込んでは、知識や情報を得るには自分で見聞するしか方法はない。全国各地から自身の足で遍路し、たどり着いた先にやっと拝める存在だったのであると思うと、菩薩様や大仏様の表情や佇まいも、どれだけありがたかったかと思いを巡らす。

(記・松原ふみこ)

「泥かぶら」

10月28日、公演予定の熊本公演次第!!

チ

ラシには、主催・新制作座、特別協賛・ミズノグループ、問い合わせ先「熊本公演事務局」とあります。

特別協賛のミズノグループの水野社長は、去年11月、熊本地震の

被災地の子どもたちにプレゼント公演をした時に出会った方です。見たいという学校が多く、嬉しい悲鳴を上げている時、援助してくださり、5日間9ステージの感動の日々を支えてくださったのでした。そして、「来年も又きまーす」と約束したことを果たそうと、今年の計画を持って伺った時、すぐに「やろう」と言ってくださったのです。それが4月。5月に会議を開き、主催の新制作座が一步も熊本に行けない間に、着々と準備を進めてくださいました。9月6日。自称応援団の皆様が所属される、熊本西南R・C(ロータリークラブ)で卓話をさせていだき、主催の劇団員が、この公演の主旨、経緯など話しました。その時R・Cの会長がおっしゃいました。「水野君がそこまでやっていることならクラブをあげて応援しましょう」と。

何よりも私が心打たれたのは、皆様が、お忙しい仕事を削っての大事業なのに、実に楽しげに生き生きとテキパキと語り、実行していただけることでした。熊本公演はきつと成功する」と確信しています。
(記・江崎はんな)

「真山青果をめぐるひとびと」

竹久夢二と青果

— 金沢湯涌夢二館 —

3

月29日、徳田秋聲記念館に貸し出していた展示品を

お持ちになり学芸員の藪田由梨さんが高尾の劇団に來られた。同行者がおられた。金沢湯涌夢二館の学芸員川瀬千尋さんであった。

藪田さんと金沢を訪れた際、よもやま話をして楽しい時を過ごし、初対面の川瀬さんとも、話をと、「さすがに真山青果と竹久夢二さんとの繋が

りはないですね？」と

聞くと、川瀬さんから

「そこ、川瀬さんから

「それがあるんです。」とのお答えが。私「ええ!!」。

川瀬さん「金沢湯涌夢

二館に、青果先生の小説

の挿絵の原画を所蔵しています。」私「・・・」。

かくして、真山美保先生からも話を聞いたことがない事なので、

恐らく美保先生も知らなかった青果と夢二の繋がりを

知ること

となったのであった。私のお願いを聞いてくださり、

金沢湯涌夢二館

〒920-1123

石川県金沢市湯涌町イ144-1

TEL: 076-235-1112

開 館: 9:00 ~ 17:30

(受付は17:00まで)

休 館: 展示入替日

観覧料: 一般300円

団体(20名以上)250円

65歳以上200円

高校生以下無料



竹久夢二「銀簪」原画 《木と二人》大正8年(左)、《座る女》大正9年(右)
金沢湯涌夢二館

金沢湯涌夢二館のご厚意によりその挿絵のコピーをいただいたのでご紹介いたします。

大正8年から9年にかけて大正日日新聞に掲載した小説「銀簪」の挿絵です。(記・真山蘭里)

劇団員の紹介 No.06

渡邊 灯人

hibito watanabe

このコーナーは、劇団員の活動秘話などをとりあげ、一人ずつご紹介します。



【プロフィール】

2018年入団。東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業後、劇団ピアニストとしてピアノ伴奏の他、編曲や音楽指導を担う。

【Q & A】

Q 渡邊さんにとって新制作座とは？

A 初めて劇団に來た時に、自分の中でビビッときて、ここで芸術をやっていきなと思ったのが最初の印象で、今では「芸術が生き続けるところ」と思っております。

Q 入団した時の夢や志は？

A 芸術って、伝統を踏まえつつ、ずっと進み続けていないと生きてはいかないと思うので、その生きた芸術に自分のエッセンスを加えられたら、すごく嬉しいことだと思ってます。

Q 携わった作品の役柄や役割、印象に残るエピソードは？

A 今年8月に夏休み特別公演で本番を迎えたのが劇団で初めての舞台でした。その前までは身内でのコンサートで、ピアノ演奏家コース卒業ということもあって、ピアノがメインというイメージでした。この公演では歌の指導、伴奏と共に

編曲も担当し、どうやったらみんなの歌が生きするような楽譜になるのか、作る側の立場として立てたこと、そして、みんなで考えられたっていうのがすごく嬉しいことでした。

印象に残っているのは、歌の指導の時に「空間を使ってください」と言った瞬間に、みんなの音程が全部よくなったこと。その時はそれが不思議で不思議でしょうがなかったけれど、伝え方のメソッドをいろいろ考える中で、みんなと歯車がかみ、その一言でパッと変わった瞬間がものすごい涙が出るほど嬉しくて、なおかつ涙が出るほどいい音楽ができてたので、すごく嬉しかったです。

Q 劇団の活動以外に熱中しているものはありますか？

A 伴奏は料理で言う“お皿”だとしたら、その料理に合っていて映えるお皿でなくてはならないと思っています。それがしっかり相づちのようにできた時がすごく嬉しくて、人と関わりあい、音楽と一緒に紡いで行くような、そんな伴奏の仕事に熱中しています。

あとは、自分で曲を作ってみようかなって、ちょこちょこっと打ち込んでみたり弾いてみてメロディーを録音したり、一個一個生きてるのが音楽と繋がると楽しい。

Q 今後の夢や目標は？

A 生涯かけての目標は「ずっと音楽と共に生き続けること、芸術と共に生き続けること」。そして、どんどん自分から何か企画して、積極的に芸術と関わるように、芸術を作っていくようにすることです。

皆様から賜りました真心の支援金(2019年9月5日現在、合計¥332,700)誠にありがとうございました。目標金額まで(¥167,300)引き続き応援をよろしくお願い申し上げます。

新制作座災害支援ボランティア公演

●岡山県真備町

ドラマティックリーディング&

眞山美保 作詞の「小さなコンサート」

日時: 2019年9月24日(火) 開演 10:00

会場: 真備陵南高校 体育館

対象: 高校生と保護者

●倉敷市立岡田小学校

ドラマティックリーディング&

眞山美保 作詞の「小さなコンサート」

日時: 2019年9月24日(火) 開演 14:00

会場: 岡田小学校 体育館

対象: 小学生と地域の方

●広島県坂町

眞山美保 作・演出 演劇「泥かぶら」

日時: 2019年11月4日(振替休日)・5日(火)
開演 14:00

会場: サンスターホール

対象: 4日(一般席¥1,000)・5日 学生



新制作座クリスマスパーティ2019

新制作座クリスマスパーティ開催日のお知らせ

日時: 2019年12月21日(土) 17:30受付 18:00より

会場: 星槎高尾キャンパス 劇団新制作座「食堂むさしの」

劇団新制作座 衣装部 [朱鷺 -toki-]

眞山美保 着物コレクション見学会

眞山美保 着物コレクションの世界を堪能する着物見学会が、(株)秋櫻舎の中谷比佐子先生の解説付きで開催されます。(着用体験あり)

日時: 10月5日(土)・25日(金)

会場: 星槎高尾キャンパス 劇団新制作座

お問合せお申込み: (株)秋櫻舎 担当: 関戸

<https://www.kosmos-chako.com>

電話: 03-5350-4261 メール: info@kosmos.ciao.jp



眞山美保 着物コレクションより



熊谷好博子 作

NEWS

「眞山青果とは何者か？」出版さる!!

星槎グループに、眞山青果の蔵書等を託して、はや10年の時が流れました。

国文学研究所の調査と展示、シンポジウムを経て、待望の「眞山青果とは何者か？」が出版されました。

新制作座と星槎グループとの関係も、著書の中に「眞山家と新制作座の現在」と題して、インタビューの形で語らせていただいています。

この本が実現するために係ってくださった全ての方にお礼を申し上げたいと思います。

研究者のための本でなく、面白く読めて眞山青果先生の人となりを理解していただける内容だと思えます。

是非、ご一読ください。

(記・眞山 蘭里)



眞山青果とは何者か?

監修: 星槎グループ

編集: 飯倉 洋一

日置 貴之

眞山 蘭里

単行本: 271ページ

出版社: 星槎グループ

発行年月: 2019年7月

定価: 本体2,800円(税別)